

大震災と原発事故を経験した「済」に移っていかなくてはならぬ、学問の世界も大きく変わっていくだろう。経済学はこれからは新たな方向として、世界に広く定着してきている。しかしリサイクルも大きな問題を抱えている。

## ■水山

生態経済学のリーダーの一人であるヘルマン・テイリーは1977年に出した著書の中で、こう書いていた。「経済学者としての私はタイタニック号の甲板でデッキチェアの最適配置を探しているような存在だ、と生態学者たちは決めつけている。市場はデッキチェアや洋傘が最適に配置されていることに注意を傾けるが、われわれが氷山にぶつからないように気をつける」とはなない。

地球温暖化といった氷山を避けるためには、「使い捨て型の経済」から「リサイクル型の経済」へ

## 埼玉経済

## 新しい資本論を求めて

## 西山賢一 経営学部経営学科長



西山 賢一氏 (にしやま けんいち) 43年生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。九州大学大学院工学研究科教授を経て、10年現職。専門は複雑系科学。主著「NHK出版」の「文化生態学の世界」(批評社)など。

いる。エントロピーというのは「無秩序さの度合い」であり、この法則によれば、リサイクルの過程で全体として秩序は減ってしまっているのである。生態学者たちには、マルクスが「資本論」のなかで引用している、地獄への道は善意で敷き詰められている」という言葉を伝えなくてはならない。

さらに原発事故はもう一つの熱力学の法則を私たちに突きつけている。「エネルギー保存の法則」である。原子力発電は、ウランや、ウランからできるプルトニウムの核分裂から得られるエネルギーを利用する。

ウランも他の原子も、宇宙の進化の過程でほう大なエネルギー

を圧縮して持っている。エネルギーは形を変えて保存されつづけるので、原発事故になってしまつと、原子が持っているあふれるエネルギーを熱エネルギーに変えて逃がすために、冷やしつつけるしかなくなる。情報や知識なら消費でなくなつてくられるが、モノやエネルギーは形を変えて残り続ける。

## ■互酬制や相互扶助

それでは経済学の役割は終わったのだろうか。むしろこれからは、より大きな役割を果たさなくてはならない。

生態学や熱力学が私たちの生活の基礎に深く関わっているのは確かだが、その上でどんな世界を作っていくかは、人と人の関わりとしてしか生み出されな

い。競争や協調に基づいた人と人の関わりから、総体としての社会がどのようにして生み出されていくかを経済学は論じてきた。

市場での商品交換だけでなく、贈与と返礼を基礎にした「互酬制」や「相互扶助」が社会を支えていることを、経済学は再発見している。震災後に生まれた地域のさまざまな活動にも、互酬制や相互扶助が生きてきと復活していることに人びとは注目している。

マルクスは人間と自然との物質代謝まで視野に入れた上で「資本論」を書いた。私たちに、その後の生態学と熱力学の成果を取り入れながら、商品交換と互酬制まで視野に入れた、新たな人と人の関係として「新しい資本論」を生み出していくことが求められているのだから。

ヘルマン・テイリー 38年生まれ。米メリーランド大学公共政策大学院名誉教授